

# 井川地区の民具収集・研究プロジェクト

外立 ますみ

## ① 研究の背景

南アルプス南麓の井川地区は、昭和44年(1969)に安倍郡井川村から静岡市に編入され、現在では静岡市葵区の最北に位置する。大井川の最上流部に位置し、その閉塞的な立地のためか古い慣習がよく残ってきた地域である。昭和32年(1957)には、中部電力の井川五郎ダムが竣工し、流域に住んでいた人々は本村を中心に代替地へ移転をよぎなくされた地区でもある。

申請者が井川地区に入るようになったのは平成12年(2000)からで、井川雑穀文化調査委員会の委員として調査に参加したことによる。その折には、田代集落内と田代の2軒が所有する出作小屋に特化して民具調査を行った。

現在、井川地区の人口は400人を割り、その約6割が高齢者である。このような状況下で、井川に伝わる生産・生業・生活の技術やそこで使われた民具を収集できる限界に来ていることに危機感を覚えたことが背景にある。

## ② 研究の方法

このプロジェクトは、専門家だけが研究・情報収集をするのではなく、井川自治会と連携をはかり、地元の有志、地域住民とともに持続的な民具収集・保護に取り組んでいくことを目指している。令和5年5月に「井川民具の会」を発足し、年度末まで週一回の活動を進めてきた。

令和5年度の収集では、所有者から寄贈されるままのかたちをとり、どのようなものが集まるのかこちらの主観を入れずに観察した。まとまった数の民具が収集されてきたので、これからの研究は、体系化を重視し、その構成要素を探していくとともに、井川での位置づけを継続して研究していく。

## ③ 研究の成果

今年度、集まった民具の分野は、焼畑、農耕、茶栽培、山仕事、運材流送、砂金採鉱、紙漉き、狩猟、養蚕、椎茸栽培、自然物採取、メンパなどの漆器類、工具などで、令和6年3月時点で総点数は600点を越える。

山畑の自給的な農業における近代での民具の変化はゆるやかであり分化はほとんどない。翻って、流送(運材)や伐採の民具は、明治期に移入されてから効率を重視した機械化へと著しい進化を遂げているため、使用されなくなった鋸などの山仕事の道具が多く寄贈されている。

研究成果としては、共同研究者多々良氏には民具に利用された樹種別の表をまとめてもらった。樹種は70種を越えている。また、運搬用具について考察した結果、ワコ(背負子)に添えられるT字形のニンボウ(荷棒)は、井川のほかに新潟県糸魚川市で使われた姫川谷歩荷(ぼっか)の持つニズンボウ(荷杖棒)に類似例があることが判明した。井川も明治期より登山家の道案内を務める人が存在しており、歩荷という荷揚げ専門職の仕様との類似点を考えると、急峻な山道環境、非常に重い荷量などに関係しているのではないかと推測している。

## ④ 研究の意義と展望

南アルプス南麓で使用されてきた民具や民俗技術については、メンパ製作工程用具や概観的な民具調査は行われてきたが、一歩踏み込んだ研究成果はなされていない。今回の研究で、その一端だが、運搬用具について分析を試みることができた。多分野にわたる詳細な民具の追跡と評価は、それぞれを掘り下げていくのにモノ情報(民具そのものから得られる情報)とコト情報(聞き取りによる民具にまつわる情報)を収集して考察されなければならない。そして、井川地域で工夫されてきたもの、外から流通したものなどの整理も必要である。これらの課題への取り組みを進めていくことで、井川の文化を明らかにしていきたい。そして、若い世代で民具研究への興味を持つような人材に引き継いでいくことも重要な課題であると思っている。